

“北の最果て<礼文・利尻>への旅”から

牧 彰

今年は、私にとって節目の年齢（古稀）に当たります。何か「けじめ」を！と思っていた矢先に、小・中・高を同じ学舎で過ごした畏友が、人生の「第2ステージ」を北の最果て「礼文島」で独り住まいをしながら「花守・花案内」などしていると今春になって聞き及び、6月28日から7月5日までの間愛車（オートバイ）を駆り立てて「礼文島」に出向き、絶品！の海胆やホッケのちゃんちゃん焼などを肴に地酒を酌み交わして旧交を温め合いました。彼とは高校卒業以来「半世紀ぶりの再会」ですから、共々「万感の想い」が籠っていますよね！

海拔0の沿岸部から礼文岳(490m)の頂部まで高山植物に覆われた奇跡の島「礼文島」の花の最盛期は、夏場の極めて短い期間(6～7月)だけです。彼は、4月末に「礼文島」へ出向いて凡そ半年間主に島内の原生花園を巡回して過し、10月初めに埼玉の実家に帰ることを此処13年来違わず日課にしているのです。彼は勤務先の大手企業を家族には一切相談もせず、定年を間直に控えた57歳で思うことがあって早期退職し、残りの人生を締め括る「自分探し」の旅路の果てに、北の最果て「礼文島」に行き着きました。「礼文島」玄関口・香深港で交わした彼の握手の力強さと「掌」の温もりに、私は改めて彼の正鵠を射た「生き様」を確信したのです。「生き様」とは、すなわち「死に様」ですよ！

多感な青年期に親しんだサマセット・モーム『月と6ペンス(画家・ゴーギャンがモデル)』を彷彿させられますよね！日本の北端「礼文島」と南海の楽園「タヒチ」は、例え気候は大いに異なっていますが、国境最前線の離れ小島には「男の浪漫」を駆り立てる何か？があるんでしょ、やっぱ！

往路は、敦賀からフェリーで苦小牧に上陸。北の大地を南北に貫く大動脈「道央自動車道」沿いに下の国道を飛ばしてオホーツク海道を北上、最北端の宗谷岬を巡って稚内から再度フェリーで利尻島・礼文島へ渡るかなり忙しい行程です。復路は、稚内のノシャップ岬から果てしなき湿原・サロベツ原野沿いに日本海オロロンラインを一気に南下して留萌に至り、新十津川町経由で小樽を探索してから、小樽港からフェリーで舞鶴に至る凡そ一週間ほどの行程でした。

唐突な訪問にも拘わらず温かく迎えてくれた旧友と、生憎の雨にもめげずに快調に飛ばしてくれた私のオンボロ愛車に、感謝！感謝！

バイク・ツーリングの全行程約1,400kmの凡そ半ばは、冷たい無情な雨に苛まれ続けました。特に苦小牧から稚内の宿までの約450km走行時には、「神は、どうして今更こんな過酷な試練を課すの？」と恨めしく思いながらひたすら走りましたが、これなども過ぎてしまえば「懐かしい旅の思い出」となること必定です！男どもには決して味わえない母になる時の苦痛なども、きっとこれと同じような感情・感覚なのかも！

長距離ツーリングの後、鉄の愛馬の脇腹(ガソリタンク)を擦って「よくぞ、頑張ってくれた！」と労うのが常ですが、今回はその感慨も一入でした。既に地球1周半ほどの旅路を共に連れ立ち、気心を知り尽くした無二の相棒なのですから。

彼の人生観・価値観などにアイデンティティ(共感)を感じ、彼の「生き様」から人生設計の糧でも得られれば！との切ない想いでした。花の浮島(利尻・礼文)で、折角ごく間近に日本百名山第一番目の「利尻富士(1,721m)」や、清楚で気品ある「レブンアツモリソウ」「レブンウスユキソウ」などがあるにも拘らず、それらと全く無縁の無粋な道行でしたが、「人生の節目」の自由気ままな「単独行」に、先ずは乾杯！因みに、今回の旅費は、凡そ14万円でした。

これからは、精々人生を達観(開き直り?)して全うするつもりですが、皆様におかれましては、今まで通りのご厚誼・ご厚情のほど宜しくお願い致します。以上



“礼文島”海岸線から<利尻富士>を望む

あれから“半世紀”、こんな＜生き様＞もある！ —「加藤一衛」君の場合—

- ◇ 1958年(昭和33年) 川口工業高校電気通信科卒業。
- ◇ 同年4月 東京渋谷の「テレビジョン技術者養成所(NHK後援)」入学。
- ◇ 同年10月 上記養成所卒業(基礎知識があるので、半年繰り上げ卒業)。
- ◇ 同年10月 三洋電機(東京)に入社。同年12月に盛岡営業所へテレビ技術者として転勤。2年後仙台へ。更に1年後に秋田営業所へ転勤して6年ほど勤務後、三洋を退職。
- ◇ 1969年(昭和43年) 岩槻光機(富士ゼロックスの前身)に就職。
- ◇ 1996年(平成8年)10月 57歳で富士ゼロックスを早期退職。
- ◇ 1996年(平成8年)10月 初めて礼文島に行き、ボランティアとして現在に至る。



加藤一衛さん

礼文島の花々を見守って今年で13年目のガイドがご案内いたします。

加藤一衛君に、これまでの＜生き様＞について聞きました。

□ 岩槻光機(富士ゼロックス)に就職してから退職まで

1969年(昭和44年)、新聞の募集広告を見て、岩槻光機(当時は富士写真光機の子会社で、現在の富士ゼロックス)に応募した。面接の後「不採用」の葉書がきたが、その翌日に「採用」の葉書がきたので、2枚の葉書を持って岩槻光機に行き、「一体どちらが正しいのか?」と質問したところ、「貴方のような仕事の経験者がほしい」といわれたので勤めることにした。

岩槻光機では、当初は仕入れた材料・部品の検査など、その後は資材部で材料・部品の調達などの仕事をした。岩槻光機に入社後、秋田の三洋電機時代の先輩からの紹介された女性(弘前出身)と、1971年(昭和46年)に結婚した。

岩槻光機に入社2年後の1971年(昭和46年)4月21日、社名変更して富士ゼロックスになった。その前日(4月20日)に全社員が一旦退職し、4月21日付で富士ゼロックスに入社した。岩槻光機の退職時に、全員に退職金が支払われた。結構な金額の退職金を手にした所為か、車通勤者が富士ゼロックスになってから急増した。

1996年(平成8年)10月、57歳の時(定年まで3年)に、会社の早期退職プログラムに則って退職した。息子が翌年3月に大学を確実に卒業できる見込みがあるということだったので、後期授業料を納入し、それ以上は金のために働きたくないと思って退職を決めた。退職するに当たっては一切妻には相談せず、会社へ退職届を出してから伝えた。

退職する3年前、1993年(平成5年)の朝日新聞に、「礼文島の高山植物盗掘被害が絶えず、放置すると花によっては盗掘によって数年後には絶滅してしまう恐れがある」とあった。その記事が頭を離れず、自分の人生＜第2ステージ＞は「礼文島で高山植物の番をするのもいいのかも!」と思ったりした。

□ 初めて礼文島へ行った時の話

退職直後の1996年(平成8年)10月、初めて礼文島に渡ったが、既に「花の季節」は終わっていた。泊まった宿の主人が、町役場に勤めていて、礼文町における高山植物保護の状況などを教えてくれた。当時の町役場には、花番をするボランティア受け入れ窓口が存在しなかった。そこで、独自の判断で、ボランティアとして「自任の番人」になることにした。そんな訳で「押しかけ番人」になり、以降礼文島で最初の、そして、今でも唯一のボランティアの「花番人」として活動し続けている。昔も今も、他には「ボランティアの花守」は不在。この立場の長所は、誰から命令されることなく、また誰にも報告する義務もないこと。全ては“ないない尽くし”で、番人としての報酬もない。全て自前の持ち出しである。

礼文島の「ボランティア花守」になった翌年に、当時の林野庁から頼まれ国有林パトロール員になる。これも、ボランティアで無報酬。2007年(平成19年)に専属契約のグリーンサポートスタッフのメンバーになる。また、同時に客からガイドを依頼されることもあり、そんな場合は、一日、または、時間単位

で休暇を取ってガイド業を全うした。しかし、なかなか自由が効き難く、体力的な面で厳しかったので、グリーンサポートスタッフはその年限りで辞めさせて貰うことになった。

□ 礼文島での生活

4月下旬から10月初めまで、「花の番人」をしている。4月下旬に車で新潟からフェリーに乗って小樽で下船して、稚内まで走って、再度フェリーにて礼文島へ渡ることを、13年間繰り返している。

4月下旬の礼文島は未だ寒く、風が吹く日は海で兎が跳び(荒波が砕けて、兎が跳んでいるように見える)、車には潮風が吹付け、フロントガラスが真っ白になる。フェリーは欠航することもあり、そんな時は道に人影はなく、ストーブをがらがら焚かないと家の中は寒い。礼文は島全体が眠った状態になり、最北端の街はあたかもゴーストタウンのようである。

高山植物保護といっても、特別なことをする訳ではなく、歩き回ることによって盗掘し難くするだけである。パトロールの姿が見えれば、盗む方も盗み難いということ。一日に8時間ほど歩き回る。朝食と夕食は家で自炊しているが、昼食は自分でおにぎりを作って持参する。富士ゼロックス時代に、子供が参加していたボーイスカウト指揮者だった経験が、今頃活かされている。

□ JALの旅行ガイドの仕事を得た経緯

2008年(平成20年)、東京にある(株)ネイチャーオフィスと専属ガイド契約した。ネイチャーオフィスはJALの下請けで、礼文島の観光ツアーを企画していて、フリーの自分の存在を探し当て、専属契約を要望してきたので引き受けた。今年はその2年目。ネイチャーオフィスが東京で客から予約を取ると、ファックスで連絡してくる。5~7月は「花の季節」で、ガイド業も忙しい。昨年は、多い時に週3回、最低でも週1回は仕事があった。それに、昆布漁の手伝いなどもあって、昨今は結構忙しい。

JAL STAGE
JAL STAGE-2

4月からの旅
2009年4月・10月

東京発

フリープラン(スライム)2日間
基本プラン

**28,800円~
117,800円**

※お申し込みは10日前までです

北海道

下記コースの2日目
南島探検(1次) 旭岳登山

礼文島ネイチャーハイキングは
専属の花ガイドがご案内します

テーマを楽しむ旅

□ 昆布漁の手伝い

昆布漁は、5月下旬から7月末まで行われる。漁のある日は、午前3時頃に漁師からの電話で起こされる。3時半頃から凡そ2時間ほど、昆布を浜辺に広げるのを手伝う。昆布は漁師が海から引き上げ、丸めた状態でトラックに載せて運んで来て、それを浜辺に敷き詰めた砂利の上に丹念に広げる。

殆んどは、養殖昆布である。養殖するには、直径3cmくらいのロープに昆布の苗芽を括り付け、そのロープを浜から500m~600m離れた海に沈める。昆布は、1年で4m~5mほどの長さに成長し、これを採取する。養殖は、何十人も漁師が個人経営で行っている。

昆布漁を行うかどうかは、その日の天候次第。晴天であることが第一条件であるが、風が強いと、船を出せないで中止となる。午前3時頃、漁師はその朝の天候を予測し、漁が可能だと判断した場合はあちらこちらに電話をしまくって、手伝い人を集める。本職の漁師は朝早いので、夜は8時頃には寝る。

昆布漁の手伝いには、時間給で1200円程度の手間賃が支払われる。昆布漁の時期には、店の人、勤め人、小中学生や子供まで、誰もが手伝う決りになっているので、昆布を干し終わってから、夫々仕事や学校に行くことになる。

□ 礼文島の季節

冬の礼文島は未体験だが、住人の話では、それほど酷い積雪はないらしい。雪はサラサラなので風に吹かれてよく飛び、吹き溜まりには1m~2mくらい積もるが、路面などの積雪は50cmとのことである。礼文島の生活では、梅雨や夏の酷暑などを知らずにすむ。水道水は一年中冷たいので、温水器なしでは、我慢できなくなるほど手が痛くなる。

利尻島の利尻富士は、これからが雪解けで、夏でも残雪がある。例年、7月1日が山開きで、9月には雪がくる。7月下旬には寒くなり始めるので、下旬以降の登山は避けている。

□ 礼文島での楽しみ

楽しみは、主に山歩きと写真撮影。また、ガイド業を通じて、いろんな客との付き合いができること。終日案内する場合は、自分の車で朝から夕方まで島中を案内して季節の花を見せる。案内が終わると、客をホテルまで送り届ける。その日に案内した花を一覧表にして、翌日ホテルに届けると、客は大いに感激して喜んで貰える。

フェリー乗り場まで、客を車で送ることもある。そんな客からは、後から礼状を戴くことがよくある。中には特別にチップをくれる客もある。山梨の客は、後日山梨のワインを送ってくれた。その返礼に、礼文産昆布を送った。また、知り合いや友人を紹介してくれる人もある。中には礼文島が気に入って、毎年尋ねてこられる客もある。4~5日滞在する客もあり、そのような場合は、隣の利尻島まで案内する。喜んだ客の中には、JALへ礼状を出す人もあり、以前のような「礼文島バックツアー」での苦情が少なくなったと聞いている。キャンピングカーでくる客や、2ヶ月もの長期滞在の客もある。

礼文島の町長を筆頭に、町役場の多くの人と知り得た。新たな「季節の花」が咲いた時の開花情報を送ると、町長は自らカメラを担いで撮影に行くようである。最近では、町長が撮影した季節の花の写真をアルバムにして、フェリーターミナル観光案内窓口においてある。(これは、私も確認しました。)

最初の2年間は、自炊できない家を借りていたもので、三度の食事には不自由した。近くのホテルに朝と夜の食事をお願いしたので、宿泊客と同じ献立を毎日食べたので、カロリー過剰で肥えてしまった。その後、自炊できる家を借りられたので、現在は頗る健康的である。

一衛さんが守る礼文島固有の花たち



レブンウススキソウ



レブンアツモリソウ

□ 年間5ヶ月も<独り暮らし>で過す気分

結構、気に入っている。今年は4月22日に新潟からフェリーに乗って小樽を経由して礼文島にきたが、その時は連れ合いも同行した。妻は数日間島に滞在して埼玉県上尾に帰り、また6月末に友達を連れて遊びに来た(私と擦れ違い)。そして、9月末に来て10月初めに礼文島を離れ、一緒に車で北海道の名所・旧跡などを観光した後、小樽からフェリーで新潟に渡って上尾に帰ることを此処数年繰り返している。

妻はそんな「礼文島への旅」を結構楽しんでいるようで、日頃はアルバイトなどで旅費を蓄えているようだ。本心から楽しんでいるかは分からないが、自分が毎年礼文島へ出向くのを救ってくれている。誠に、感謝に堪えない!

白州次郎・正子夫妻がいみじくも言われるように、夫婦円満の秘訣は<いつも一緒にはいない>ことに尽きるのかも!